



# 洋上アルプス

No.335 2023年2月5日

発行  
林野庁屋久島森林生態系保全センター



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は  
こちらにあります  
[http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima\\_hozen\\_c/](http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/)



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL 0997-42-0331



## 高層湿原保全対策検討会の開催（12月26日）

TKPガーデンシティ鹿児島中央（鹿児島会場）及び当保全センター（屋久島会場）を中心に、「令和4年度第2回世界遺産地域における高層湿原保全対策検討会」が開催されました。

今回は、9月14日・15日に開催された令和4年度第1回検討会及び現地検討会の経過を踏まえ、乾燥化が進む花之江河、小花之江河において、①水流分散対策 ②地下水涵養対策 ③浸食防止対策等について検討されました。

平成30年度から議論された高層湿原検討会も本年度が最終となり、会議では木道や休憩デッキ、植生保護柵等の撤去及び水路へのヤシネットを使った堰の設置等について意見が出されました。



高層湿原検討会屋久島会場

この会議で議論された意見等については、2月に開催される令和4年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会に報告され、具体的な高層湿原保全対策を関係機関が推進することとしています。

## 西表森林生態系保全センターとの意見交換（1月23日～24日）

当保全センターの職員3名は、西表森林生態系保全センター（以下、西表センター）へ出張、管内の希少な動植物の保全活動、森林環境教育及び外来種対策等を学び、意見交換を行いました。

1日目は、西表センターの後藤専門官と春田主事にマングローブ林や、サキシマスオウノキ、絶滅危惧種であるタシロマメの調査プロット等の案内・説明を受けました。海水でも生育できるよう、葉に余分な塩分を蓄積させるマングローブ林の樹

種や、板根を持つサキシマスオウノキ等、珍しい生態の植物ばかりで、大変勉強になりました。また、仲間川では、観光用の遊覧船が立てる波がマングローブ林に悪影響を及ぼすことから、速度に規制がかけられていることなど、自然を保全するための対策がしっかりと定められていることに感心しました。

2日目は、西表センター内において管内の説明や具体的な取組事例（希少種の保護活動、外来種対策及び漂着ゴミの対策）などの説明を受け、当保全センターからは現在実施している取組（モニタリング調査、著名木調査及び森林教育など）の現状と課題について意見交換を行いました。

今後は両センターとも情報を共有し、管轄している豊かな森林を守ることを確認し意見交換を終了しました。



マングローブ林について説明を受ける職員

## 榕城小学校において森の学習会を開催（1月14日）

当保全センターでは、ヤクタネゴヨウ保全の会からの職員派遣依頼を受け、西之表市立榕城小学校6年生(77名)を対象に、屋久島森林管理署と共同で森林教室を実施しました。

晴天であれば小学校近郊の公園で実施するのですが、当日は生憎の雨であり、通算4年連続となる榕城小学校体育館内での開催となりました。

当保全センター及び屋久島森林管理署は前半の講義を担当し、まずアイスブレイクとして、植物の名前についてのクイズを行いました。クイズには有名でない植物もありましたが、多くの児童たちが連続で正解し、非常に驚きました。

その次に行ったのは葉の特徴についての話で、紙と針金で出来ている葉っぱの模型を使いながら、バナナの葉の切れ目が何故できるのか、といった説明をしました。

講話以外にも、杏仁豆腐のような香りのする、バクチノキの葉を持参し、児童たちに配布して匂いを嗅いでもらいました。独特の匂いを嗅ぐにはコツがあるので、なかなか匂いがせず悪戦苦闘する姿も見受けられました。

その後は種子の分散についての話を行いました。種子が遠くへ移動するにはどうすればいいか、という問いに対して、子どもたちは積極的に答えてくれ、また色々なアイデアを考えてくれました。

松ぼっくりについての説明も行い、何をすれば開いた松ぼっくりが閉じるのか、という問いをしたときに、すぐに「水に浸せば良い」という答えを多くの児童が返してくれ、松ぼっくりについて非常に詳しいことに感心しました。

前半の最後に、飛ぶ種子の模型（アルソミトラ）を配布し、各々で作って飛ばしてもらいました。皆で何度も飛ばす練習をしてくれ、楽しみながら種子の飛ぶ様子を学んでもらえました。

後半はヤクタネゴヨウ保全の会が講義を行い、絶滅危惧種であるヤクタネゴヨウの保全活動の取り組みや、ヤクタネゴヨウの葉や松ぼっくりの解説、松枯れの原因であるカミキリムシやマツノザイセンチュウに関する説明等がありました。

その後は枯れた松を斧で割り、中にあるカミキ



クイズに挑戦する子どもたち



飛ぶ種子の模型（アルソミトラ）を飛ばす子どもたち



ヤクタネゴヨウ保全の会による講話

リムシの幼虫を児童たちに見てもらった体験もあり、児童たちは興味津々な様子でした。

最後に、学校の先生から感謝の言葉をいただき、森林教室のプログラムは終了しました。



## 屋久島こんちゅう探訪 終

公益財団法人屋久島環境文化財団インストラクター 渡邊 卓実

気になったものに興味が湧く、私の性格上一番厄介なところかもしれない。

屋久島に棲息するクワガタムシ類は何種類分布しているかご存じだろうか。現在、9種が記録され、その内「ヤクシマ」と付くのは5種もいる。中でも屋久島固有種として有名なヤクシマオニクワガタ（通称ヤクオニ）は見た目からしてカッコ良く見惚れてしまう（図1）。

ヤクオニは標高約500m以上に棲息するため、普段、目にすることはあまりない。しかし、「ヤクシマ」の名が付いて身近で会える種類がいる。ヤクシマノコギリクワガタだ（図2）。

ヤクシマノコギリクワガタ（以下、本種）は屋久島固有亜種でここでしか会うことができないクワガタムシである。大顎（ハサミの部分）の湾曲が強く、体の幅は広く、赤褐色の体色をしているのが特徴だ。

日本に棲息するノコギリクワガタは、オスの大きいものだと7cmを超えるが、本種は全体的に小さく見える。本種の最大サイズを調べると、過去の報告から6.9cmであった。昆虫の0.1mmはかなりのサイズ感に違いがあるため、やはり小さいようだ。

私は気になってしまった。「ヤクシマノコギリクワガタの平均サイズはいくらなのだろう」。

まず、2021年と2022年の2年間で調査を行い、方法はとても単純なもので、見つけたオスの個体をひたすら採集をし、体長を測り、写真を撮っていく。この単純作業が一番大変だった。結果、2年間の調査で約1,200個体を採集した。ただ、前文でも記したとおり、全て記録後は元気な状態でリリースしている。

現在、まとめているところだが、約4.5cm前後が最も多く記録されているため、やはり本種は全体的に小さいと考えられる。これから研究確度を上げていけばまた何かわかるかもしれない。



図1 ヤクシマオニクワガタ



図2 ヤクシマノコギリクワガタ

調査時の採集にあたっては、私が島内で本種を確認してから見られなくなるまで、どのような天候でも毎日出かけた。その期間は約4ヶ月半ほどであったが、今思うと異常である。このような調査を積み重ねて、昨今の凶鑑などが出来ていると考えると先人に頭が下がる。

「私は変態ではない」と前文\*で記したが、見る人によってはそうなのかもしれない。それは、読んでいただいたみなさんの判断にお任せする。

（おわり）

\*本紙No.333 2022年12月号



## 屋久島北部地域の垂直方向の植生モニタリング調査（令和2年度）

〔標高1400mプロット（高塚山山頂）〕 確認種数：43種（平成27年度調査：35種）

◆調査結果の概要 高塚山の山頂直下にある。風衝及び落雷被害のため、樹高10mに達しているのはスギ1本だけである。尾根付近は落雷の直撃を受けたと見られる焼け焦げた痕跡のある枯死木が目立ち、所々ギャップになっている。亜高木層はスギ、ヒメシャラ、リョウブ、低木層はサクラツツジ、シキミ、ハイノキ、草本層はハイノキ、アセビ、ユズリハが多い。ヤマボウシは亜高木層にある唯一の個体が枯死し、他の階層では見当たらず、更新が危惧される。目立ったシカの痕跡は見当たらないが、シカの嗜好植物がほぼ倍増し、食害の影響を強く受けた林相となっている。

### ◆優占種の変化

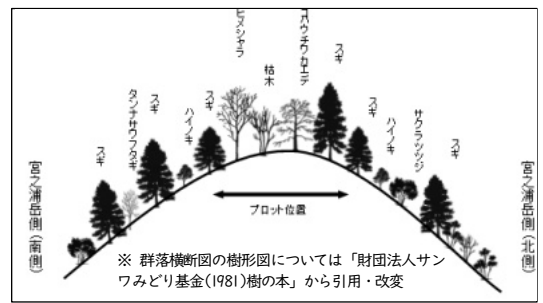
階層区分	平成17年度	平成22年度	平成27年度	令和2年度
高木層（9.0m以上）	—	—	—	スギ
亜高木層（4.0m～9.0m）	スギ	スギ	スギ	スギ
低木層（1.2m～4.0m）	サクラツツジ	ハイノキ	サクラツツジ	サクラツツジ
草本層（1.2m未満）	ハイノキ	ハイノキ	ハイノキ	ハイノキ



H22（10年前）のプロット内



R2（本年度）のプロット内



標高1400mプロットの群落横断面

## 「次世代の屋久島の森林・林業を守り育てる森林の体験・学習活動」シリーズ④ ～人と森をつなぐ～ 親子3代で山への思いを受け継ぐ製材所

ウッドショップ木心里 代表 鹿島裕司 子育て支援tetote 代表 日高ゆかり

安房保育園の園児が12月16日、有限会社有水製材所代表の有水速人氏の指導のもと、製材所見学を行った。参加したのは安房保育園の年少、年中、年長児の36名と保育士6名。

一週間前に伐採見学を行った年長児は、園で屋久杉や島内の木材にふれるなどして予習をするほど、木材への興味や関心が芽生えてきている。代表の有水速人氏「みなさん、のこぎりって知っていますか?」と帯鋸を見せ、どのように丸太が木材に製材されているかを、子どもたちの目線に合わせて丁寧に説明した。製材された角材を触ったり、匂いを嗅いだりするなど製材業の仕事について学んだ。

なぜ、製材所で働いているんですか?の質問に「屋久島で生まれ育ち、小さい頃から海や山、川で遊んできました。屋久島の木々が大好きで、製材所を継ぎました。父から受け継いだ技術を息子たちに伝えていきたい。」と親子3代で林業・製材業を営んでいる思いについて話した。息子の有水佑太氏は園児にとって、山で伐倒を行ったヒーロー的存在。

「ゆうたさん」と名前を覚える子もいるほどだ。地杉をすべて無駄なく活用できるように薪に使ったり、大鋸屑は牛や豚の寝床に活用していることを子ども達に説明した。そして、自身の地杉の家に子ども達を招待し、川上から川下まで木が運ばれ、どのような工程で材となり、日常生活でどのように木が活用されているのかを説明した。「森を元気にするためにおじいちゃんの木を間伐して元気な子どもの苗を植え、育てているんだよ。」と森の循環について子ども達に伝えた。

この春、卒園を迎える子ども達と2月に植栽体験を行う予定。森づくりは、未来づくり。私たちの森の活動はまだまだ続く。



製材所の仕事を説明する有水親子（有水 速人氏、佑太氏）



地杉のお家で記念撮影「やくしま、だ〜いすき」のハートポーズ